令和２年度　国立那須甲子青少年自然の家　教育事業

「第１回　なすかしの森　ワンダーキッズキャンプキャンプ」報告

「火のある生活」　　令和２年７月１８日（土）

【目的・趣旨／概要】

小中学生が，仲間とともに協働体験を通して，防災スキル等を身につけながら，助け合うことの大切さに気付き，普段の生活にも生きる考え方や態度を養うことを目的とする。

第１回は「火のある生活」をテーマに，日帰りで行った。

【参加者】

小学５年生４名　　６年生１名　　中学１年生１名　　（計６名）

【プログラム概要】

【出会いのつどい】

初めて出会う６名が協働体験を始めるためのアイスブレイクゲームを行った。また，テーマに合わせて「防災」や「火」についてのイメージを共有し，この後の活動につなげた。

はじめは，緊張感からか，声が出なかったが次第に少しずつ打ち解ける様子が見られた。

【火おこし体験】

生活に必要なエネルギーの一つとしてある「火」についての防災スキルとして，火おこし体験を行った。マッチやライターの仕組みを学んだり，燃えやすいものを考えたりしながら，一人一人が小さなかまどを作り，火おこしに挑戦した。

木の皮が燃えやすいことや，マツボックリは炎が維持しやすいことなどの気づきを参加者同士で共有する場面があり，狙いの一部は達成された。晴天であったら，フィールドから自分たちで燃えそうなものを見つける活動をする予定であったが，雨天であったため，あらかじめ用意しておいた枝やマツボックリなどを利用した。しかし，湿度が高く炎を維持することは困難であった。

【防災食体験】

節水や，ごみの減量という点を防災食の観点と考え，ポリ袋を使っての炊飯とポトフづくりを行った。前段の火おこしのスキルを使ったり，ペットボトルのふたで体積を量ったりと普段の生活では行わないような調理方法であった。

なべを２人で一つ使うことや隙間時間で片づけを促すことで，自然と役割分担が生まれ，目に見える形での協働体験をすることができた。また，缶詰食もあり，保存食という観点でも防災を意識することができた。

【別れのつどい】

振り返りとして，一つ一つの活動の意義を確認した。また，一緒に活動した仲間の良かったことを伝え合うこともできた。さらに，ＳＤＧｓの視点に触れ，これからの具体的な行動宣言を一人一人が行った。

日帰りの事業であったため，仲間の良かったところを具体的に伝えられなかった子もいたが，丁寧な振り返りができたため，行動宣言については具体的な事柄が多かった。また，第２回も参加したいとの思いをもって散会とすることができた。

【成果】

・火おこし体験から，身に付けたスキルを調理活動につなげるというストーリー性のあるプログラム構成で実施できた。
・防災意識や，ＳＤＧｓの視点について参加者の心に残る事業とすることができた。
・分量体験や，失敗体験も防災意識につなげるきっかけとなるので良かった。
・今回の事業を通して，日常生活につなげる意識を持たせることができた。
・参加者アンケートには，肯定的な意見ばかりが記入されていた。

《参加者の声》

「火をおこすところが一番楽しかった」「資源を大切にしたい」「防災食がとてもおいしかった」「ＳＤＧｓについて知ることができてよかった」

【課題と方策】

・新型コロナウイルス感染防止対策もあり個の作業が多く，包丁や火の扱いについて安全面で大人の目が多く必要と感じた。
・日帰りプログラムということで，時間配分がむずかしい，あらかじめ準備しておくことが多くなってしまった。準備なども参加者で考えて実施するようなゆとりを持てるとよかった。
・密集しないような手立てを講じたつもりだが，子供たちが集中すればするほど，密になりやすい状況が生まれてしまった。
・研修支援として，提供できる活動プログラムに反映させる。

国立那須甲子青少年自然の家［作成］企画指導専門職：増田　直人